

追悼 心に残る室井綽先生の助言と姿

白岩 卓巳*

今も私の本棚に兵庫県生物学会編集の『室井博士物語—竹と共に七十年—』『図解植物観察事典(共著)』『図解動物観察事典(共著)』などがある。

ことあるごとに疑問事項を調べるたびに目を通して行くと、室井先生の話題とその度の映像が重なって浮かび上がってくる。もちろん、先生の晩年までの厳しく教えられた時の姿が重なってである。

「オーイ、勉強しているか。」「いま、君は何を調べている?」「しっかり継続してやりたまえ。」顔を合わすたびに、これらの言葉がふりかかってきた。

室井先生との最初の出会いは、児童・生徒を自然に親しませる「神戸生物クラブ」の例会時から始まる。野外で親や子供に尋ねられる植物名を間違えて教えたり、曖昧に言ったりすると傍らから即座に指摘し、「正しく教えてやらないと駄目だ。」と親子がいなくなった後でそっと詳しく教えてくださる。ユーモアを交えた説明を受ける。そのころ、タケ・ササ専門の大先生だと聞いていたが、当時も草木はもちろん、自然のことなら何でも答えられるというすごい先生であった。

以後、お会いするたびに、「いま君は何を研究している?」「自分で観察したことを図や文にした原稿を書いているか?」と、また、話題になっている生物学の事項について詳しく解説して下さったこともしばしばだった。「教材植物やシダ植物を中心に勉強しているのか? 徹底してやれよ。」その頃、兵庫県でのシダ研究者には稲田又男、内海功一先輩がおられた。いろいろと教えを受けながら共同観察会を持った。タケ・ササ研究をはじめ、研究上のことで室井先生をはじめ岡村はた先生にも多くの教えを受けた。

私の40年前の自然メモ帳に、室井先生から受けた電話のメモ書きが残っていた。「植物奇形学という面で研究を深めてみないか。君の今やっているシダの分類……といっても一生の趣味だけに終わってしまうよ。松村(松村義敏氏?)という人が一生かけて研究し、原稿を書いて印刷されていないものがある。それに君が修正や新しい資料を加え、将来は二人の名で本にしてほしい。奇形学は今後、公害の問題とも絡んで大変重要な関心事となる。ひとつ踏ん切りをつけて研究し



写真：研究室の室井綽先生

てみないか。」1時間以上の長い電話がかかったことがあった。私は「考えさせてほしい。」とその場は電話を切った。先生の若造に対する暖かさに胸を打たれながらも、その話はそのまま終わった。

阪神大震災後、室井先生は奥様を亡くされた。数年後には先生は体調を崩され、明石の介護施設に入られた。一度見舞ったところ、以前にお届けしていた私の著書『水生シダは生きる』を何回も目を通して下さっており、「うん、よく書いたね。でも、ここはこう書いた方が良かったよ。こちらもこうすれば……。」細かなところまでの助言をいただいたことも鮮やかな印象として残っている。他界された後、長く先生のお世話もされていた岩島とみ子さんから「白岩先生のことはよく話題にされていましたよ。」と聞かされた。

偉大な師・室井先生の安らかなお眠りを祈りながら。

* 兵庫県神戸市灘区鶴甲3-12-26-401
2014年3月30日受理

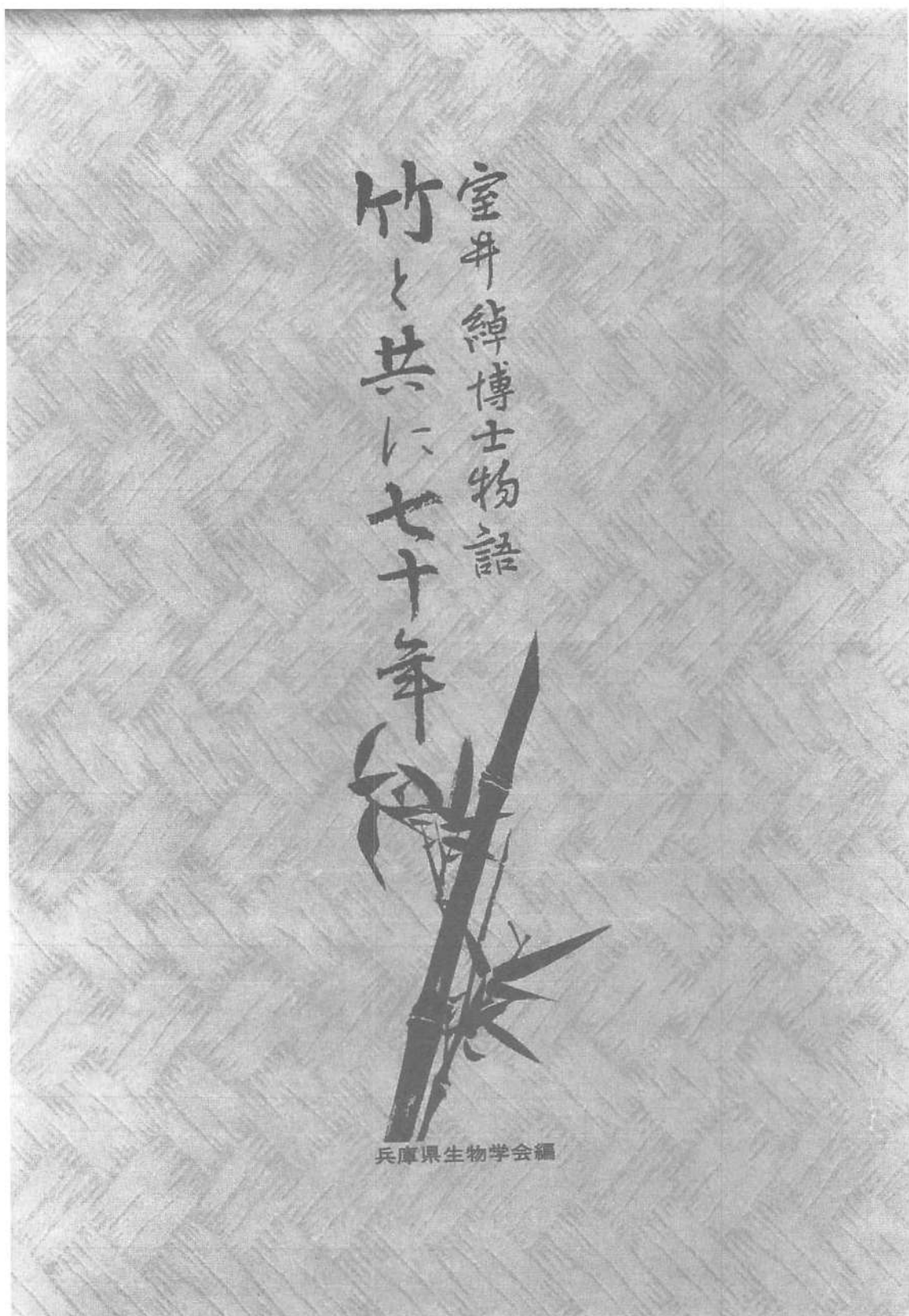


写真 『竹と共に七十年』